2025/1/26

ルカの福音書　講解メッセージ㊶

『ルカの福音書 17 章 20-37 節　神の国はいつ来るのか』

■「神の国はどこにあるのか」

> 「さて、神の国はいつ来るのか、とパリサイ人たちに尋ねられたとき、イエスは答えて言われた。「神の国は、人の目で認められるようにして来るものではありません。『そら、ここにある』とか、『あそこにある』とか言えるようなものではありません。いいですか。神の国は、あなたがたのただ中にあるのです。」」（ルカ 17:20-21）

「神の国はいつ来るのか」を考える前に、まず「神の国とは何か」を理解しておきましょう。

旧約聖書には、「神の国」という表現は出てきません。代わりに「永遠の国」という言葉が使われています。

旧約時代、預言者たちは、終わりの日に永遠の国が実現すると語りました。その預言の中心となるのが、ダニエル書です。

> 「私がまた、夜の幻を見ていると、見よ、人の子のような方が天の雲に乗って来られ、年を経た方のもとに進み、その前に導かれた。この方に、主権と光栄と国が与えられ、諸民、諸国、諸国語の者たちがことごとく、彼に仕えることになった。その主権は永遠の主権で、過ぎ去ることがなく、その国は滅びることがない。」（ダニエル 7:13-14）

イエス様が、ご自身を「人の子」と呼ぶのは、この預言を踏まえてのことです。神が人となって来られた方、それがイエス・キリストです。

ダニエル書は、さらにこの国について、「さばきが行われ、彼の主権は奪われて、彼は永久に絶やされ、滅ぼされる。」（ダニエル 7:26）と語っています。「神の国」は、「滅びることのない永遠の国」であり、悪の力は完全に取り去られます。イエス・キリストの時代の人々は、「神の国」と聞けばすぐに、このダニエル書の預言を思い浮かべ、預言の成就を待ち望んで「神の国はいつ来るのか」「どこに現れるのか」と問

い続けました。

その問いに対してイエス様は、「神の国は見える形で来るのではない。あなたがたのただ中にある」と語られたのです。

神の国は永遠の国です。「永遠」とは、変わらず、滅びず、始まりも終わりもないことです。一方、私たちが生きる「有限」の世界は、常に変化し、始まりがあり、終わりがあります。有限性の世界の中で永遠性を見ることはできません。だから、この世界の延長線上に「神の国」を見ることはできないのです。ところが、当時の人々は、「終わりの日」は、この歴史の延長上にあると考え、ダビデの王国が再び地上に現れ、天と地が新しくなるのだと信じていました。イエス様は、その考えを否定されたのです。

■「神はあなたのうちにおられる」

人はみな、神のいのちによって生かされています。そのいのち＝魂には、神を慕い求める性質があり、自然と神の方へ向かおうとします。つまり、私たちの内には「神とはどんな方か」を感じ取る物差しが最初から備わっているのです。しかし、悪魔の働きによって神が見えなくなったため、人は外側に神を探すようになりました。永遠性の神を有限性の世界の中で探すということは、無意識に理想を追い求めるという形になり、理想を叶えてくれそうな人を“偶像”とする結果となりました。

イエス様は「神は見える形にはできない」と教えておられます。永遠性の神を有限性の世界に押し込めることはできません。あなたを生かし、支えている永遠の神は、あなたの外ではなく、あなたの内におられます。つまり、あなたが求めてきた理想や幸福は、あなたの外側ではなく、初めからあなたの内におられる神のもとにあるのですが、人はそれに気づけないのです。

イエス様は「初めから、私はあなたと共にいて、あなたを背負っていた。」と語っておられます。だから、心を神に向け、内側を見るなら、そこに神がおられるのです。

パリサイ人たちは外側に神を求め、自分を立派に見せることで神に近づけると思っていました。しかしそうではなかったのです。

「神の国はあなたがたのただ中にある」とは、永遠の国は、“外側”ではなく、私たちの“内側”に実現するということです。

■キリストの十字架

神の国――永遠の国を実現するためには、まず“死を滅ぼす”必要があります。神と私たちを隔てている壁である死――これは悪魔の支配そのものです。ですから、こ

の死が滅ぼされなければ、私たちの内に神の国を本当に実現することはできません。私たちの肉体が滅びる時、私たち自身も滅びてしまいます。その前に、神は私たちを救い出すために死を滅ぼす必要があったのです。

この計画は昔から神が定めておられ、すでに実行されています。それがイエス様の十字架です。聖書はこの十字架の出来事を「人の子の日」と呼びます。

> 「イエスは弟子たちに言われた。「人の子の日を一日でも見たいと願っても、見られない時が来ます。人々が『こちらだ』とか、『あちらだ』とか言っても行ってはなりません。あとを追いかけてはなりません。いなずまが、ひらめいて、天の端から天の端へと輝くように、人の子は、人の子の日には、ちょうどそのようであるからです。」（ルカ 17:22-24）

誰もが神の国に入れるようにするためには、十字架の贖いが不可欠でした。死という有限性の世界を滅ぼし、永遠の国を開く――これはダニエル書の預言にある「彼の支配が奪われ、永久に滅ぼされる」という言葉の成就です。この十字架は、それよりも前の時代の人々にも適用されます。神は、有限性の世界に住んでおられませんから、時系列とは関係ありません。だから聖書には「キリストは十字架の贖いをもってノアの時代の人々に語られた」とあります（ペテロの手紙）。また創世記 3 章では、アダムとエバにも同じ贖いが適用されている場面があります。すべての時代に、神は同じ救いを適用されます。

イエス様は、「人の子の日」を「見たいと願っても見られなくなる」と、ご自身の十字架の死と天への帰還を示唆しておられます。そして、神の国をこの地上のもののように追いかけてはならないこと、その日はいなづまのように突然訪れるから、油断しないようにと警告をなさいました。

> 「しかし、人の子はまず、多くの苦しみを受け、この時代に捨てられなければなりません。」（ルカ 17:25）

イエス様の十字架の死は突然訪れました。私たちの肉体の死も突然やって来ます。

また、イエス様は十字架に架かる前、裁判があり、嘲りがあり、多くの苦しみを受けられました。イエス様は、クリスチャンになったあなた方も同じように多くの苦しみを受ける、と語られています。

クリスチャンになるとは、この世で楽になることではなく、「多くの苦しみを引き

受けること」ことでもあります。パウロも「私たちはキリストを信じる信仰と同時に苦しみをも賜っている」と語っています。

■クリスチャンになるとは

クリスチャンが受ける苦しみの中心は、外側の出来事ではなく、内側の葛藤です。

クリスチャンになるとは、自分を永遠性で規定し直すことです。これまで私たちは、学歴・職業・国籍・財産・行いなど、この世界の条件――有限性によって自分を説明してきました。外側の規定が高いほど安心し、人と比べ、自分の価値を外側で判断するのが、この世界の生き方です。しかし神は、人をそのように規定しません。神はご自分の言葉で、あなたを新しく規定されます。

あなたは神の子
あなたはキリストの体の一部
あなたは永遠のいのちを持つ者
あなたは愛されている者
あなたは死からいのちへ移された者

クリスチャンになるとは、イエス・キリストがあなたのために十字架にかかり、復活されたという事実を、自分の規定として受け入れることです。ところが、この新しい規定は、これまで自分を形作ってきた古い規定と必ずぶつかるため、苦しみが生まれます。神が規定する新しい自分へと歩もうとするとき、私たちは長い間まとってきた古い服――肩書き、評価、プライド、自己像――を脱ぎ捨てなければならないからです。これは痛みを伴い、時間もかかります。

誰かがあなたを否定し、価値のない者として扱ったとしても、神は「あなたは良い」「あなたは義なる者だ」と語られます。この二つの基準の間で葛藤が生まれ、その葛藤がつらさとなって現れます。クリスチャンになるとは、この世の基準で幸せになることではなく、この世の基準との葛藤を背負うことです。しかし、その葛藤の中でこそ、神が私たちを引き上げ、本当の幸福を教えてくださいます。

外側の問題がどれほど解決しても、それだけでは本当の幸せにはなりません。外側のものはすべて消えていくからです。この世界の関わりはやがて終わります。最後まで残るのは、あなたの内側にある神との関係だけです。だからこそ、この関係が育たなければ、苦しみの本当の解決には至りません。私たちは、神から与えられる苦しみを通してこそ、本当の幸福を知る者へと変えられていくのです。

人は、悪魔の働きによって死が入り込み、内側が見えなくなりました。その結果、神との関係が見えなくなり、すべてを外側で判断し、外側に幸福を求め続けるようになりました。それでも、土台におられる神は、今も私たちに呼びかけ続けておられます。私たちが生きている間に、この呼びかけに応答しなければ、救いを受け取ることはできません。神との関係が回復しなければ、人は永遠に神から離れたままになってしまいます。時間は迫っています。

■神からの警告

「人の子の日に起こることは、ちょうど、ノアの日に起こったことと同様です。ノアが箱舟に入るその日まで、人々は、食べたり、飲んだり、めとったり、とついだりしていたが、洪水が来て、すべての人を滅ぼしてしまいました。また、ロトの時代にあったことと同様です。人々は食べたり、飲んだり、売ったり、買ったり、植えたり、建てたりしていたが、ロトがソドムから出て行くと、その日に、火と硫黄が天から降って、すべての人を滅ぼしてしまいました。人の子の現れる日にも、全くそのとおりです。」（ルカ 17:26-30）

イエス様の十字架の死は突然訪れました。同じように、私たちの死も突然訪れます。だからイエス様は、「心の準備をしなさい」と警告されます。

ペテロの手紙には、ノアの時代にもキリストが霊として福音を語られたとあります。しかし応答したのはノアの家族八人だけでした。彼らは水を通って救われました。これは、バプテスマの象徴です。ノアの大洪水は「滅ぼす話」ではありません。すでに滅びの中にいた人間を、神が救い出した話です。

また、ロトの日にも同じことが起こりました。人々は普通の生活を続けていましたが、ロトが町を出たその日に、火が降って町は滅びました。ロトの家族は信じて従ったため助かりましたが、ロトの妻は助かりませんでした。彼女は後ろを振り向き、塩の柱になりました。

後ろを振り向くとは、古い自分に戻ろうとすることです。神は永遠性であなたを新しく規定しているのに、「昔の自分のほうが良かった」と思い、 有限性の自分に戻ろうとすると、その新しい規定が台無しになってしまいます。

イエス様が「後ろを見るな」と言われるのは、 古い価値観――肩書き、誇り、成功、評価――に戻ると、永遠のいのちの道から外れてしまうからです。ロトの妻の出来事は、永遠性の規定を受け取らず、古い自分に戻ろうとする姿を象徴しています。

そして、私たちの肉体の死も突然訪れます。だからイエス様は次のように警告されます。

> 「その日には、屋上にいる者は家に家財があっても、取り出しに降りてはいけません。同じように、畑にいる者も家に帰ってはいけません。ロトの妻を思い出しなさい。自分のいのちを救おうと努める者はそれを失い、それを失う者はいのちを保ちます。」（ルカ 17:31-33）

人は死が近づくと、自分が築き上げた財産や肩書きがどうなるのか心配します。しかし、財産も肩書も死後に築かれる墓も、この世界のものです。イエス様が、「家に帰ってはいけない」と言われているのは、有限性で規定された古い自分に戻ってはいけないということです。ロトの妻のように、後ろを振り向いてはならないのです。

有限性の規定は死とともにすべて消えます。この地上での財産、肩書き、評価、名誉、体……これらの中で、天国に持っていけるものは何ひとつありません。しかし、これら有限性の規定を捨てる者は、永遠のいのちを受け取ることができるのです。これがクリスチャンの戦いです。

イエス様は、問いかけます。「あなたはどちらを選ぶのか。」

この世界の言葉で自分を規定し、この世界の評価を信じて生きるのか。それとも、神の言葉を信じて生きるのか――。

神の言葉を信じる者は生き、この世界の言葉を信じる者は滅びます。誰も二人の主人に仕えることはできないと、聖書は教えます。どちらか一つを選ばなくてはなりません。これがクリスチャンの苦しみであり、祝福です。

> 「あなたがたに言うが、その夜、同じ寝台でふたりの人が寝ていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。女がふたりいっしょに臼をひいていると、ひとりは取られ、他のひとりは残されます。」（ルカ 17:34-35）

人がどのように生きて来たかは、外側からは見えません。しかし、神を信じた者は生き、信じなかった者はそのまま滅びます。神が滅ぼすのではありません。神は救いたいと願っておられるのですが、その救いを受け入れるかどうかは、本人の決断です。

人生は長いようで、長くはありません。有限性の世界に富を蓄えても、死と共にすべて消えてしまいます。しかし、神との関係に富を蓄えるのなら、それは永遠に残ります。

信仰は、納得ではなく、決断です。

納得とは有限性の世界の合理性のことで、この世界で証明できることを指します。しかし永遠性は有限性の世界では証明できません。神がいることを、この世界の条件で証明することは不可能です。

だから信仰は、有限性の規定を飛び出し、永遠性の規定に移る決断なのです。素直に信じる決断、子どものように信じる決断です。大人になるほど信じるのが難しくなるのは、有限性の世界にどっぷり浸かり、「納得できない」とつまずくからです。それでも乗り越える必要があります。

「あなたは神の言葉を信じて生きるのか。それとも、この世界の言葉を信じて生きるのか。」イエス様は、私たちに決断を求めておられます。

> 「弟子たちは答えて言った。「主よ。どこでですか。」主は言われた。「死体のある所、そこに、はげたかも集まります。」（ルカ 17:37）

弟子たちは、イエス様の話の意味をまったく理解できず、見当違いの質問をしました。そこでイエス様は、「死体のあるところにハゲタカも集まります」と象徴的な言葉で答えられました。この言葉には深い意味があります。

私たちは皆、霊的には死んだ者として生まれてきます。神はその死んだ者に呼びかけ、死からいのちへと移してくださいます。しかし、神の呼びかけに応答しない者は霊的に死んだままです。聖書はその状態を「死体」と呼びます。ハゲタカは死体に集まる鳥ですから、これは神の呼びかけに応答しない者が滅びへ向かうことを象徴しています。体は土に帰り、霊は永遠の滅びに向かいます。

人は「死んだら別の世界がある」「生まれ変わる」と想像しますが、イエス様はそれを否定されます。死んだら終わりであり、体は消え、霊は滅びます。しかし、神の呼びかけに応答する者は永遠のいのちを受けます。

イエス様は問いかけられます。「あなたはこの世界に留まりたいのか。それとも、この世界の外に出たいのか。」あなたが求めている神は、外側ではなくあなたの内におられます。神の国はあなたの内にあります。永遠の規定を受け入れ、有限の規定を捨てるなら、あなたは救われます。その道には苦しみがあります。だからイエス様は、「私は天に帰るまでに、多くの苦しみを受けなければならない」と言われました。クリスチャンも同じで、苦しみを通して永遠のいのちへと引き上げられていきます。

クリスチャンが神と共に生きるというのは、この世界に特別な場所が用意され、そこで幸せに暮らすという意味ではありません。神はすでに、あなたを幸せにする場所

をあなたの内に備えておられます。神の国はあなたの内にあります。あなたの内におられる神を見上げ、神の規定を受け取ってください。

この世が語る否定的な言葉はすべて嘘です。この世の規定は死とともに消えます。行いで救われる人は一人もいません。救いは、ただ信じる信仰によって与えられます。キリストはあなたを愛し、十字架であなたの罪を赦し、三日後に復活されました。その復活のいのちを、あなたも受け取ることができます。これが神の規定です。この規定を信じるなら、誰でも救われます。

キリストがあなたに語られた真実の規定を信じ、この世の言葉に惑わされず、神に目を向けて歩みましょう。そこに真の幸福があります。